

令和4年4月1日発行 春燈/第77巻第4号(毎月1回1日発行) 昭和21年7月22日第3種郵便物承認

春燈

2022 April

4月号



成瀬櫻桃子の句

人に七情あぢさみの色七変化

『素心』昭和五十六年

七情とは、仏教で喜・怒・哀・楽・愛・悪・欲の七つの感情のこと。他者の心情とも読めるが、ダウン症候群の美菜子さんのことが片時も頭を離れることのなかった櫻桃子先生なればこそ、心の救済を求められたご自身の試練と葛藤は如何ばかりであったかと思われる。

七変化とも呼ばれるあじさいの、日毎に色を深め変わりゆく姿に、ご自身を重ねられたのであろうか。

後藤眞由美

成瀬櫻桃子の句

菜の花や近江に多き観世音

「春燈」昭和五十六年

師は学生時代から春燈に投句。万太郎、敦の聲咳に接しつつ、独自の「春燈」世界を築かれたとある。その広範な見識と詩囊の深さは多岐にわたる。

掲句は古刹古仏の宝庫の湖北周辺での旅吟。渡岸寺十一面観音など拝観され心を癒されたであろうと拝察される。

私もかつて関西在勤時代に度々訪れた地であり平明で広がりのあるこの一句に惹かれました。

山下健治

安立公彦

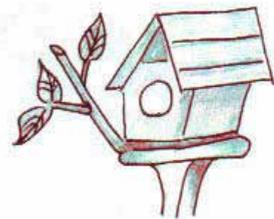
蔵壁の午後の日色や春を呼ぶ

高階にあまた灯の色春めくや

やはらかに影の寄り添ふクロツカス

ひと跳びにさ庭とび越す恋猫や

松過の膳に白子の子持鮎



燈下集

○ 江草 礼

寒蛭吃水浅き湖の舟

煩惱は百八もなし寒鴉

息継ぎの口はへの字に初泳ぎ

鮫鱈鍋講積長き奉行殿

鮫鱈の眼の行方吊し切り

○ 岩永はるみ

初日記空の青さを先づ記す

朝練に向かふ少年冬木の芽

寒夕焼まだ拗ねてゐる背中かな

ゆくりなく鮫鱈鍋の句座となり

静けさの底の静けさ夜の雪

○ 林 紀夫

一筋が百すぢとなり初明り

この道の先は大吉初景色

樸や一子相伝の刀鍛冶

語り種の企業戦士や日向ぼこ

白菜や無人売場の招き猫



○ 小張 志げ

初水天宮両手にぬくき人形焼

まゆ玉の影のゆるるや旨寝の子

水餅の蓋をあくれば母の顔

探梅や風を切り裂く鼻の先

尾長鶏尾のながながと春を待つ

○ 栗原完爾

寒早逃げもかくれもせぬ齡

真砂女なき仁右衛門島や若布寄す

新若布湯搔きてもどす海の色

さりさりと米磨ぐ春の近きかな

初恋は妻にもありしヒヤシンス

○ 本多遊方

内々で済ます法事や寒椿

冬の庭期待の花芽数へをり

日脚伸ぶ庭の作りを直すかな

南海に散骨望む雪仏

節分や早くも游子七回忌

○ 武田巨子

切山椒江戸の香りをふふみけり

煮凝に言葉の固さほぐれけり

淑気満つ巨岩に掛かる注連一本

霧水林足音までも吸ひ尽くす

雪晴の梢と梢光り合ふ

○ 諸岡孝子

女正月口三味線の松づくし

幸せのくしやみ小さき芹の粥

遺されし春着や梅の女紋 (二回忌)

忌を修し雨となりたる冬桜

転生のその果て知らず春の霜

○ 小泉三枝

結ひ上げて繭玉ゆらす髪飾

トレモロのごと繭玉と影の揺れ

神棚のうぬぼれ鏡嫁が君

松過の元に戻れぬ遅刻癖

白息に白息重ね励ませり

○ 平野加代子

雪しんしん深層心理呼び覚ます

うぐひす豆ふくふく煮ゆる春隣

余生とは闇の中なり鬼遣らふ

冴返る電子書籍の長恨歌

ドアカメラ春めく声のすぐそこに

○ 田嶋洋子

熱き思ひ閉ぢ込め鶴の凍てにけり

女正月それぞれ長所言ひ合へり

来し方の幸運不運梅香る

鶯や名字同じの家三軒

嫁ぎ来し家の味なり木の芽和

○ 菅澤陽子

初鏡笑顔のわれに挨拶す

新海苔の艶と香りや朝の膳

伽羅の香の北京印泥筆始

慎重に落款つくや明の春

同齡の友の欠けたる初句会 (禮)

○ 金山雅江

一茶の句添へて信濃の晦日蕎麦

走る子の破魔矢の鈴の高らかに

不老水てふ寒九の水をくむ列に

鷺かへて優しき嘘を貰ひけり

成人式若者にこそワクチンを

○ 太田佳代子

大粒の雪に変はるや道の果

冬童しづかに水を欲しけり

着膨れてATMの最後尾

何度でも仲直りして寒雀

蠟梅や後ろ姿に亡父の影

○ 久保久子

数へ日や叩けど開かぬ小抽出し

鎌鼬ところに風の吹く日かな

捨て毬の渚にあそぶ実朝忌

稜線の筋金入りや寒茜

待春や浅瀬に動く小さき泡

○ 廖運藩

初稽古昔紅顔のでぶ剣士

初稽古兄貴譲りの柔道着

初夢は戦時喉から手の練羊羹

浮世来て九十五度目の初御空

買初は気前宜しき振興五倍券

○ 久米 憲子

嫁が君臆病風に吹かれけり
後ろから付いてこないで雪をんな
寒雀日影きらひの日向好き
軒低き門前町や牡丹鍋
福鈴の春引き寄する音色かな

○ 小倉 陶女

波音のさそふ眠りや宝船
をりからの初観音に途中下車
初みくじ気休めほどは信じけり
骨休めの雨になりたる餅あはひ
寒見舞まつは無沙汰を詫びにけり

○ 荒井 慈

繭玉や春燈人の心意気
横断歩道猫のよこぎる三日かな
初弥撒のまばゆきステンドグラスかな
何もかも笑ひとばせり女正月
おかげさまをかみしめてゐる寒牡丹

○ 佐渡谷 秀一

冬木の芽ボール蹴る声途切れなく
幼児らのおうと声上ぐ霜柱
山手線席譲らるる初詣
懐かしきカレーの匂ふ四日かな
小寒や予備の電球見つからず

○ 沼田 桂子

風景のストップモーション雪の朝
冬雲のじつとなにかに耐へてゐる
またたける冬の金星瑕理なし
白々と冬残月の寡黙かな
駅伝の通り過ぐるや寒牡丹

○ 三代川 玲子

松ヶ枝に雲ひとつなき初景色
舞殿の床ふみ鳴らし初神楽
雪に立つ牡鹿の角の神々し
ぐつぐつと飯噴いてくる深雪晴
寒肥や土つき崩しつき崩し

○ 豊谷 青峰

初旅や東京駅の銀の鈴
寒鴉東宮御所の監視台
胸中に灯る一灯初みくじ
大銀杏結つて使者待つ寒日和（新大関）
墨堤の空のかがやき春隣

瀬戸 峰子

早暁の丸き残月冴返る
交はしゐる話の余韻冴返る
冴返る山湖の水位低きまま
朝日より夕日親しく冴返る
杉山の鉾先ゆるび冴返る

○ 高埜 良子

青丹よし奈良に買初陀羅尼助
鉄瓶の音の清かに淑気満つ
三重の塔の毬抱く猫や冬（豪徳寺句）
絵馬掛の冬日集むる母子の文字
梅一輪呼ぶ友の声弾みけり

清水 美子

お陰様でと言へる齢や去年今年
人といふ字のごと夫と去年今年
夫の本心聞いてしまひし初寝覚
箱根駅伝の母校の優勝初茜
かな部門の大賞受賞春着の娘

本 田 保

片 山 博 介

何やかや急かされてゐる師走かな
年の暮一段落をつくるかな
過ぎ去りし時の帰らず去年今年
人の罪己が罪としクリスマス
看護師の慈愛深き瞳去年今年

山腹に大の字浮かべ初日影
をさなごの数の子を囓む音や佳し
読初は近松門左『世継曾我』
野守あぬ蒲生野に摘む若菜かな
寒釣や世を思ふとも避くるとも

余言 安立公彦

うみやまのしんと明けゆく阪神忌 西川 保子

「阪神淡路大震災」。平成七年一月十七日、兵庫県南部地震による災害。兵庫、大阪、京都の被害により、死者六千三百人、家屋全半壊二十万九千戸という、第二次大戦後の日本における最大の災害とある。その頃還暦を迎えたばかりの私も、その日のニュースは忘れられない。

この句、「しんと明けゆく」という海山の姿が、自ずとこの震災を弔っているようだ。天災地変よ再び私たちの地上に近付くな、という人々の声が聞こえて来るようだ。

三度目のワクチンを待つ春を待つ 深川 敏子

世界の新型コロナ感染者数は、一位の米国（七八五二万

人）と十位のスペイン（二〇八〇万人）の中に、インド、フランス、英国、ロシア、ドイツ、トルコ、イタリアがあり、日本は四四九万人、と新聞は記す。膨大過ぎる感染者数である。私は自身の第三回目のワクチンの接種を最近行った。市役所の出張所での接種だったが、その物々しさに、予防接種の効果を頷かせるものが感じられた。私は病身のわが身を庇い、往復とも車を利用した。

この句、悼尾の「春を待つ」が善い。まさに春を待つ、ワクチン接種である。コロナ禍よ去れ。

枯れてゆくもののしづけさ母の忌来 三宅 文子

母堂の回忌をこころ静かに祈念する思いが善く出ている。「枯れてゆくもののしづけさ」は、句を読む人の心にも亡き母堂の姿を呼ぶかすかな静謐さが感じられる。「父の忌」ではこうはいかない。「母」という存在の有難さを母無き年月の上にも辿る句である。

この句、上五、中七の詠みが善い。句を見る人により、「枯れ」には千差万別がある。この句の幅を深めるのも、その言葉の誘いであると言えよう。

尾長鶏尾のながながと春を待つ 小張 志げ

尾長鶏の春を待つところは、一つの風景として結びつくものがある。或いはどこかで見た古い絵画の一景だったかも知れない。「尾のながながと」の後に、「春を待つ」が置かれていたのも、何とも伸びやかな姿に見えるのかも知れない。それはまた、水餅の蓋をあくれば母の顔の場合にも言えよう。水餅、母の顔、尾長鶏、と対象はさまざまだが、春待つ思いは変わらない。「俳句の写生」は、奥深い。

慎重に落款つくや明けの春 菅澤 陽子

「落款」は、書画に自筆で署名し、印を押す事を言う。作品の発表会で、良く目にするところだ。押印ひとつが、その会場の雰囲気を出す。

この句、「慎重に」があるから、作者の落款だろう。「明けの春」はもとより年のはじめ、へ年齢の友の欠けたる初句会があるから、「明けの春」にも一抹の淋しさが漂う。「友の欠けたる」の淋しさが良く理解出来る。

をさなごの数の子を囁む音や佳し 片山 博介

数の子を囁む幼児と、卓を並べている思いのする句である。話は変わるが、投句用紙の下端に通信欄が設けられて四年経つ。目下その欄に、通信の書いてある投句用紙は幾

つかある。ただし手に取って見ると、その文字が判読出来かねる用紙がかなりあり、残念である。

この句の作者の場合は全く異なる。通信欄にいつも絵が描かれている。それも風景の一部でなく、それ一つが絵になるものである、通信欄の空間に、しっかりと納まりている絵である。こうして見ていると、絵と俳句は善く睦む。そういう期待を持ちながら、毎月の出句を見るようになった。

今回の絵は、木造家屋の「短篇」である。彩りが落ち着いている。何とも言えない静けさを伴う絵である。自筆の絵のそれぞれに、画く前の対象に、真剣に取り組んでいる姿が感じられる。

ゆるぎなき空の青さや初景色 西岡 啓子

この句を見て、肯くひとは多かるう。上五の「ゆるぎなき」が、中七、下五をしっかりと支えている。対象が「初景色」故に、一句は再び上五の「ゆるぎなき」に還り、一句の完成をもたらすのだ。

一昨年、作者は夫君を失った。へひとり帰る部屋の静けさ日脚伸ぶ。「初景色」にしても、「日脚伸ぶ」にしても、天上の無限の空間が、作者の句ごころを誘う。今後とも健吟あれと願うのみ。

当月集

安立公彦選



○ 小林文良

元日や馬に酒吹く調教師
福だるま呉るる川崎競馬かな
少女騎手よ汝の勝鞍の初笑
初旅の富士真向ひに早泊り
読初は文庫の久保田万太郎

○ 古谷昌女

○ 種田利子

謡初「鶴亀」を舞ふ老夫婦
(クラスマート御主人白晝)
やはらかき日差し髪膚に初暦
降る雪や光源氏の相聞歌
今生の余白しみじみ雪あかり
初硯延命治療拒否と書く

○ 佐藤まさ子

○ 西谷恵美子

初富士や旧街道をたどる旅
マスクして肘のタツチの御慶かな
公園に集ふ子供ら手毬つく
七草の揃ふ畦道つづきけり
初便メールに写る笑顔かな

初夢や二重廻しの亡夫婦
笹鳴や色なき庭を明るうす
落つる度家中響く屋根の雪
風邪に寝て尽きなき夢に疲れ果て
故郷の山懐かしや月朧

春燈の句

安立 公彦選

水仙花一輪手折り友見舞ふ
東京 山口 陽子

ひとり居の抹茶一服日向ぼこ
利根川原梅一輪の暖かさ

山梨 川井真理子

足さばき美しき着物や初参

東京 立 竹人

尼寺の郵便受けや枇杷の花
初富士の今にも暮るる窓へ寄る
七草のそろはぬ粥のうすみどり
水涸れて橋脚ながき日数かな

兵庫 橋本貴美代

餅花や百二の母を言祝ぎぬ

千葉 萩原登代子

芹摘みてふる里の水汚しけり
湯豆腐や後幾年を夫と在り
猫柳水音とどまるときもなし
忘れ得ぬ母の海苔巻雛まつり

広島 落久保万里

日を享けてゐて餅花のひとつこぼれ

群馬 小菅 澄重

餅花にそれらしき夜のきたりけり

遠富士を窓にとどめて冬晴るる

